

研 究 紀 要

地 理 歴 史 科 ・ 公 民 科 部 会

全体講演	「地形から見る日本文明」 竹 村 公太郎（日本水フォーラム 代表理事）	1
研究発表	【日本史分科会】「最難関への論述指導を通じて」 青森県立弘前高等学校 齋 藤 開	6
	【世界史分科会】「14 世紀の地球規模の環境変化が世界史に与えた影響についての考察 ～無理のない範囲での ICT 活用～」 青森県立青森高等学校 道 川 貴 生	8
	【地理分科会】「地域再発見 地理フィールドワークの授業」 青森県立三沢高等学校 酒 田 孝	12
	【公民分科会】「主権者教育について考える」 青森県立八戸中央高等学校 嵯 峨 真己子	14
今年度の部会の動き・研究テーマ		16

紀要編集委員 佐 藤 琢 磨（青森県立田名部高等学校）
鈴 木 康 貴（青森県立田名部高等学校）

「地形から見る日本文明」

講演者：竹村公太郎（日本水フォーラム 代表理事）

1 はじめに

私は地形の専門家であり、生涯を通じて大規模な土木構造物の設計や建設に携わってきました。歴史をはじめとする文系の知識には自信がないものの、日本全国を転勤し、各地の地形を詳しく観察してきた経験を持っています。そこで歴史的な出来事や従来の歴史観に対して疑問を抱き、地形を主な視点として歴史を解釈するという独自のアプローチを取っています。古文書は読めませんし、歴史の詳細や登場人物の名前を覚えることも苦手ですが、自信のある地形を通じて新しい視点から歴史を再考し、その観察を基に意見を述べていきます。あくまで地形だけからみた、歴史のおかしい点ですので、それを念頭に聞いていただければと思います。

2 講演内容

(1) 忠臣蔵 ～地形からみると幕府の八百長だ～

最近出版した『日本史の謎は「地形」で解ける』シリーズ4冊目の『日本人の起源篇』においても書いているのですが、忠臣蔵の話。私はずっと「八百長だ」と言ってきました。地形的に見ると、全て幕府の仕掛けだったということが分かるんです。地形からその意図が全部見えてくるんです。浅野長矩が切腹し、赤穂の浅野家は取り潰しになったんです。そして、広島の本拠の方に戻され、赤穂の浅野家は取り潰しになるだろうと思っていた。しかし、実はそうじゃなかったんです。将軍・綱吉が亡くなったとき、幕府は特赦を与えて浅野家を復活させたんです。そして、その復活先がどこかという、皆が考えるような徳島の阿波ではなく、房総半島の先端、江戸幕府の直轄地だったんです。この場所は直轄地であり、江戸湾に入る重要な地です。房総半島の先端は江戸湾の入口を守る非常に戦略的な場所だったんです。黒船来航の際にも、この地は重要な拠点となりました。幕府は浅野家をこの場所に復活させたことで、国防のために地形を最大限に利用したんです。これは、私が房総半島を訪れたときに見つけた「安房神社」という場所で気づいたことなんです。この神社は、徳島からやってきた人たちが作ったものです。つまり、古代から徳島の人々がこの地に来ていた証拠があったんです。

幕府が浅野家をこの場所に配置することで、彼らを幕府の中枢に引き込んだと言えます。こうして地形を通じて歴史を見直すことで、従来の解釈では見えなかった真実が浮かび上がってくる、という話をしていきます。

(2) 地球規模の気候変動と縄文時代の環境変化

30 万年間のデータをもとに話します。このデータは、国立極地研究所が南極でボーリング調査を行い、氷のコアを採取して得たものです。氷の層を調べると、過去の大気中の温度が分かり、その結果、地球の気候がどのように変動してきたかが明らかになります。30 万年間の気候データを分析すると、温暖期と寒冷期が交互に繰り返されていることがはっきりとわかります。例えば、今から 6000 年前、縄文時代には現在よりも気温が約 2 度高く、その結果海面が上昇していました。逆に、2 万年前の最終氷期には海面が今より 140 メートルから 160 メートルも低かったことがわかっています。つまり、地球は長期的に見て、寒暖の周期を繰り返しているわけです。現在、温暖化が叫ばれていますが、このデータを見る限り、これが本当にどうなのか、ちょっと疑問があります。長い目で見ると、今の時代はむしろ寒冷化の途中かもしれない。江戸時代から気温はずっと下がってきている。我々が今本当に温暖化の真っ只中にいるのか、それとも気候変動の大きなサイクルの一部でしかないのか、まだはっきりとした結論を出すことはできません。過去 30 万年の記録を見ると、気候は常に上下してきたことが分かるため、今後その変動が続く可能性があります。

地形の話もしておくと、例えば、今の日本の沖積平野、これは全部過去 6000 年間に川が運んできた砂が積もってできた土地です。縄文海進と呼ばれる時代には、今の平野部の多くが海に沈んでいた。今の地形っていうのは、氷期と温暖期が繰り返される中で川が作り上げたものです。私たちが住んでいる土地は、過去の気候変動によって形作られたものであって、ただ単にそこにあったわけではありません。データを見る限り気候は常に変動してきたことは事実です。そして、その変動が現在の地形や環境にも大きな影響を与えている。だからこういった長期的な

視点を持って、今後の気候変動に対応していくべきです。

(3) 奈良盆地における日本文明の誕生 ～日本書紀の信憑性～

大和の奈良盆地で文明が生まれた理由について、奈良盆地で文明が発展したというのは事実なんですけど、なぜそこだったのか、という理由についてはあまり語られていない。それを私の考えを交えてお話ししますと、神武天皇が宮崎から東へ移動していく際、東に良い土地があると聞いたわけです。日本書紀に書かれている話ですが、東へ先発隊が派遣され、先にその土地を調べに行くんです。彼らが調査をして戻ってきたときに、神武天皇に「360度緑に囲まれた素晴らしい土地があります。まるで天国のような場所です。」と報告された。それが奈良盆地だったんです。当時、大阪はまだ湿地帯で、とても文明が発展するような土地ではなかった。大阪の地形は川の中に浮かんでいるような状態で、上町台地だけが少し高くなっている程度でした。だから、大阪は適していなかった。逆に奈良盆地は、四方を山に囲まれていて、中央に大きな池があったと言われています。360度緑に囲まれて、自然の要塞のような地形です。非常に安全な場所だった。

日本書紀では、この旅の途中で地方の豪族と戦ったり、道案内をしてもらったりするエピソードが描かれていますが地形的に見ると、九州のような場所ではなく、もっと安全で文明が発展しやすい場所を探していたということがわかります。九州は大陸からの脅威がいつ来るかわからないので、常に不安定な場所だったんです。だから、神武天皇たちはもっと内陸で、安全な奈良盆地を目指したんだと考えられます。

奈良盆地にたどり着いた彼らは、その地に定住し、文明を築き上げました。奈良の遺跡は南北に広がっているんですが、これは盆地全体にわたって文明が広がっていた証拠です。奈良は観光地としても広範囲にわたっていて、京都と違ってまとまりがなく、観光が難しい場所でもありますよね。藤原京や平城京、飛鳥の古い神社などバラバラに点在していますが、これは奈良盆地全体に文明が広がっていたからです。

この地が選ばれた理由の一つは、その安全性です。緑に囲まれていたため、少数の盗賊が来ることはあっても、大軍が攻め込むのは難しかった。また、水資源が豊富で、どの川からも清らかな水が湧き出ていることも大きな要因です。そして、舟を使ってどこにでも行ける交通の便も優れていた。これらの条件が整っていたため、奈良盆地が文明の発祥地となったわけです。日本書紀にある「東に良い土地がある」という記述は、この地形を考えると非常に現実的です。だからこそ、神武天皇たちはその報告を聞いて奈良盆地に移り住む決断をしたんでしょう。日本書紀は歴史書とも言われますが、地形的な観点から見ると、この話は非常にリアルで信憑性が高いと思っています。

(4) 京都への遷都 ～地形から解き明かす遷都の理由～

さて、奈良時代から征夷大將軍が始まりました。709年からのことです。その後、平城京から長岡京に移りますが、それ以前の709年から征夷大將軍はスタートし、坂上田村麻呂が有名です。歴代ずっと続いて徳川家康の征夷大將軍まで至るわけですが、つまり、朝廷を守るための親衛隊として、武士が生まれたんです。

『清水寺縁起』を見ると、敵の鼻が高く金髪に見える。これが奈良の朝廷軍にやられている様子なんですけど、これを見るとロシアの人間じゃないかと思うんです。つまり、当時の北海道が「蝦夷」と呼ばれていた頃、私は大陸から北の方からいろんな人が流れ込んできて、日本列島を挟んでしのぎを削っていたのではないかと感じます。この絵からその可能性もあります。

桓武天皇は奈良から平安京に移るんですが、その前に長岡京に行くんです。なぜ奈良を出てしまったのか、これは歴史の謎で、歴史家の方々は藤原氏や道鏡など人間関係からいろいろと議論していますが、私はそれが簡単なことだと思っています。なぜ桓武天皇が奈良から京都へ行ったのか、奈良の周辺が丸裸になっていたんです。年間100万本の木を必要としていた。アメリカの歴史学者コンラッド・ダットマンが日本に来て、全国の神社を巡った。寺社仏閣の建築では、必ずどこから材木を持ってきたかを記録していたので、それを調べました。これを追跡すると、奈良時代に琵琶湖の北まで木を取りに行っていたことが分かります。つまり、奈良の周辺は丸裸になってしまったので、ちょっとした雨が降ると砂が流れてしまって、湖が埋まって水が悪くなり、20万人住んでいた人々の糞尿が溜まってしまう。エネルギーがなくなり、水が汚くなり、水運もなくなり疫病が発生するという状況です。だから、桓武天皇は隣の大きな琵琶湖を抱える淀川水系へ行っただけなんです。

こうして、桓武天皇は長岡京に行ってしまう。この長岡京は大きな巨椋池があった湖です。奈良盆地の水運からたどって原風景に行ってしまった。これは桓武天皇の失敗だった。巨椋池は当時まさに水があふれている状態だった。これが大きな問題で、桂川、宇治川、木津川が合流して、この狭い場所で流れ込んで淀川に入る。水害が起こ

るのは当然だと思います。

桓武天皇はたった 10 年間で長岡京から京都に移ります。理由が分からないから怨霊の世界になったりしますが、これは違います。はっきり言って治水上の失敗です。何度も水害を受けることになります。地形的に見ても間違いありません。だから、京都に移った後、今も水害が起きないのは、あそこが巨椋池より 20 数メートル高いからだと思います。

私も近畿で勤務したことがあるんですが、日本海をずっと歩いていくと自然に京都に入ってくる。瀬戸内海の山陽道をたどると京都につく。海からでも、淀川を通って京都につく。京都から山科を越えて大津に出て北陸道、東山道、東海道を広げる。まるで光が一点に集中して広がっていくレンズのように。決して大阪には行かない。新幹線も大阪を飛ばして京都から神戸に行く。仕方ないから途中で新大阪という駅が作られた。大阪は端っこなんです。どこから行っても、道を歩いていると自然と京都に行ってしまう。だから、京都が 1000 年以上都だった理由は、地形が情報の集約点になったからだだと思います。桓武天皇が長岡京から京都に行ったことで、日本列島の人たちが同じ情報を共有する一つの中心点になったと私は考えています。

(5) 徳川家康が地形的に不利な関東に中心を移したのはなぜか

1600 年の関ヶ原の戦いの後、家康は天下を取るわけですが、他の大名たち、今川や武田、織田、豊臣など、天下を目指した者たちは、常に京都を重視していました。京都の頂点に立つことが権力の象徴だったわけです。しかし、家康は関ヶ原に勝利した後、さっさと京都を背にして、あえて荒地の江戸に行ったんです。江戸は単なる田舎ではなく、最悪の場所と言っても過言ではありません。まず、江戸は地理的に大変な場所でした。箱根の山を超えるのが非常に難しく、道も狭かった。さらに、江戸までの道のりは非常に文明から遠く、当時の人々にとっては「文明の果て」とも言える場所でした。

実は、家康が 1603 年に関ヶ原の戦いに勝利し、江戸に移ったという話は、それよりも 10 年前から準備されていたことでした。1590 年、豊臣秀吉が北条氏を滅ぼし、家康はその時点で関東に移されていたのです。1590 年の段階で、家康は関東入りを余儀なくされました。家康はその後 10 年間、江戸を拠点にフィールドワークを行いました。彼は関東全域を歩き回り、江戸周辺を視察し続けたのです。

関東という土地は、当時非常に荒れ果てた場所でした。武蔵野台地の東端に位置する江戸には、川がほとんどなく、水が不足していました。降雨があっても数時間で水が引いてしまうような土地だったため、農業に適しておらず、農民もほとんどいなかったのです。共同体もなく、不毛の地でした。また、武蔵野台地は、縄文時代には 5 メートルも海面が高く、その影響で土地には砂が大量に堆積していました。家康が江戸に入ったときもこの地域は大湿地帯であり、荒川が 6000 年間にわたって砂を積み上げてきた痕跡が残っていました。

さらに、江戸の水不足を解決するために玉川上水が作られたのは 1653 年のことで、それまでは水の供給が極めて困難だったのです。この地域がどれだけ不毛であったかを物語る地形の証拠も多く残っています。例えば、江戸城を中心とした周辺の土地は、まさに大湿地帯に囲まれた不毛の地だったのです。

では、なぜ徳川家康がこのような場所を選んだのか？その答えは今も研究されています。NHK の討論会などでも様々な説が出されました。ある歴史家は、豊臣秀頼がまだ大阪城にいたため、家康がその脅威から逃れるために江戸に移ったと言います。他の学者は、家康が江戸に移ることで権力基盤を強固にし、長期政権を目指したと説明します。しかし私の考えは違います。

徳川家康が江戸に移ったのは、実は関西がすでに終わりを迎えていたからです。関西はすでに荒廃しており、戦国時代の間に山々の木は切り尽くされ、エネルギーが枯渇していました。エネルギー不足は当時の人々にとって命に関わる問題であり、関西地域はすでに持続不可能な状況に陥っていたのです。戦国時代の京都の山々は木がなく、裸山になっていたことがその証拠です。そのため、家康は自らの長期政権を築くために関西を見限り、新天地である関東、そして江戸を選んだのです。この選択が、徳川幕府の礎となり、長期にわたる平和と繁栄をもたらしました。

京都は美しい場所として知られているけれど、本当にそうだったのか、という疑問があります。例えば、羅生門に関して言えば、実際には映画や CG で作られたような綺麗なものではなく、黒澤明の映画で描かれたような荒廃した姿だったのです。当時の京都の周辺の山々も、現在とは違って「はげ山」と化していました。

これは、戦国時代の京都の姿を物語っています。山々の木が切り尽くされて、エネルギーが枯渇していたのです。昭和の時代に入るまでに、エネルギーが非常に重要であったため、人々は木を切り倒してしまいました。木を切らなければ生きていけなかったのです。米や穀物を食べるためには火が必要で、その火を起こすためには木を燃やさ

なければならなかった。そのため、戦国時代や江戸時代、さらには第二次世界大戦の直前にも、何度も山々が裸になったのです。

この状況は京都だけでなく、日本各地で繰り返されてきました。戦国時代には、関西も例外ではありません。京都の山々だけでなく、周辺のエリアもすべて木が失われていました。特に戦国時代において、寺社仏閣は木材をどこから調達していたのかというと、日本全国、さらには朝鮮半島からも木材を取り寄せていたのです。例えば、紀伊半島や朝鮮半島、山口県あたりから木材を運んでいたという記録があります。これはつまり、関西地域にはもう木が一本も残っていなかったことを示しています。

そのため、関ヶ原の戦いの時には、木がない荒れた山々が広がっていたのです。今では、新幹線で関ヶ原を通る際に山が見えますが、当時は木がほとんどない裸の山でした。実際に関ヶ原の戦いを描いた映画でも、戦いの舞台となる場所が、木々がない開けた場所であるはずなのに、現代の風景では木が生い茂っています。映画のシーンでは森の中の戦いとして描かれていますが、実際は木のない裸の山で戦いが繰り広げられていたのです。

こうした背景があるため、徳川家康が関西を見限って、関東へ移ったことが理解できます。関西はすでにエネルギー資源を失い、もはや長期政権を築くには適していないと判断したのでしょう。

(6) 明治以降の人口移動と、現代の人口減少社会を考える

藩という概念を崩壊させたのは、実は鉄道の導入です。明治5年、新橋と横浜の間に鉄道が開通しました。その後、東海道本線が完成し、北海道へも鉄道が伸びていきました。この鉄道網ができた瞬間、明治23年には帝国憲法が制定され、議会がスタートしました。鉄道の導入と帝国憲法の制定が同じタイミングなのは偶然ではありますが、日本列島を一気に交通網で結び、中央集権化を加速させました。それまでの封建制度、つまり地方分散の権力構造を、鉄道が一気に東京に集中させたのです。藩というのは、地方分散の象徴でしたが、鉄道によって日本中の若い世代が自由に移動できるようになり、みんなが東京を目指すようになったのです。

私の父も「自由だ、東京に行っていいんだ」と言って列車に乗りました。もちろん、大阪や名古屋でも良かったのですが、基本的には東京が中心でした。日本中の若者が東京に集まり、そこで学び、議論し、憲法を作り、企業を立ち上げ、民主制度の国民国家を作り上げていったのです。これが私たちの近代史の始まりです。

明治時代、日本の人口は急激に増加しました。一度人口が爆発し、その後また急増しました。そして今、人口が減少し始めています。皆さんは日本の文明史上、初めての経験をしているのです。これまででない、歴史上の特異点に差し掛かっています。だからこそどう進むべきか、多くの人が悩んでいると思います。

私たちの世代は成長し、物を作り、社会を発展させることが得意でした。しかし、これからの時代は違います。どうやって社会が小さくなっていく中で、国や地方を守り続けるのか、その答えを教えてくれる先例はありません。これを皆さんが考えて実行していかなければならないのです。東京一極集中は、もう行き過ぎています。私は地方分散が答えだと思っています。これが私の考えです。

(7) 地形から考える青森の縄文遺跡の価値

それでは、次は青森についてお話ししましょう。青森という場所、これがまた重要なんですよ。実際に青森は古代日本文明の先端にあったんです。本当のことを言いますが、青森は日本の古代文明の発祥地の一つ、いや、もしかしたらその中心と言ってもいいくらいです。

まず、2万年前の青森の地形がどうなっていたかを考えてみてください。今とは全く違いますよ。氷河期の真っ只中だったんです。寒さがとんでもなく厳しい時代です。そして、その後、気温が徐々に上がり、6000年前には縄文時代に突入しました。でも、それで終わりではなく、また気温が下がっていく。この気温の変動が繰り返される中で、今の青森の地形ができ上がっていったんですね。

その中で登場するのが、大平山元遺跡。この遺跡は1万3000年前のものです。1万3000年前ですよ。驚くべきことに、この遺跡は山の中にあるんです。なぜこんな寒い場所に人がいたのか？と疑問に思いますが、事実としてそこには人が住んでいた。そして彼らは、この厳しい環境を何とかして乗り越えて生活していたわけです。さらに注目すべきは青森のこの遺跡がユネスコの世界遺産に登録されているということです。ただの遺跡じゃない。世界的に重要な遺産と認められているんです。青森の遺跡がそれほどまでに価値あるものであるということを示しています。

この話はここで終わりじゃありません。2万年前の青森、その時代には川が流れ、湿地帯が広がっていました。そして、その湿地帯が当時の人々の生活基盤となっていたんです。さらに、最近の調査で分かったことですが、青

森周辺には1万もの縄文時代の遺跡があることが確認されています。1万ですよ。このような寒冷地にこれほど多くの人々が集まっていたのは非常に不思議で、興味深いことです。

また、20万年前にまで遡ると、人類がすでに青森で活動していたという痕跡が見つっています。知恵を持ち、道具を作り、しっかりと生活を築いていたんです。そして、青森で発見された遺跡には、高度な宗教的儀式を示すものも多数見つっています。これは、単なる原始的な集落ではなく、既に高度な文明があったことを示しています。

特に注目すべきなのは、青森の遺跡では100体以上の埋葬が行われているということです。単なる生活の場ではなく、これは社会的なシステムや宗教的な観念がすでに存在していた証拠です。そして、これらの遺跡の多くが温泉地帯の近くにあったんです。青森の寒冷な環境でも、温泉が人々の生活を支えていたんです。この知恵があったからこそ、彼らは厳しい環境を生き抜くことができたんですね。

青森、これはただの地方都市ではありません。この地には、日本の古代史の謎がまだまだたくさん隠されています。青森の遺跡、そしてその歴史をさらに探究すれば、これから新しい発見が次々と出てくるでしょう。

(8) 仮説「人間の起源は東南アジア」

出雲の11万年前の遺跡は日本の歴史の中でも特に古い遺跡ですが、今後さらに多くの遺跡が発見されるでしょう。現在、ホモサピエンスが約20万年前に誕生したというのは、DNA解析の結果からも世界的に認められている事実です。つまり、20万年前に人類は猿と分かれ、今の私たちの祖先が誕生しました。そして、11万年前にはすでに人間が日本にも存在していた可能性が示唆されています。

人類がアフリカから移動を開始し、約4万年前には日本列島にたどり着いたとされています。しかし、この移動ルートや日本列島の独特な地形には、まだ多くの謎が残されています。特に日本の遺跡が見つっている場所や、東南アジアとのつながりを考えると、その謎がより深まります。

さて、地形についてですが、赤道直下に位置するのはアフリカ、中南米、そして東南アジアです。赤道直下の地域は氷河期の影響を比較的逃れ、温暖な気候が続いていたと考えられます。この日本列島で、寒冷な気候の中で石器時代の遺跡が見つっているのは、非常に興味深いことです。実は、これが東南アジア湾と関係しているのではないかというのが、私の仮説です。

地震や火山活動を見てみると、日本列島から東南アジアにかけての地域に「二股に分かれた場所」があります。この場所には海底山脈が広がっており、昔は海面が低かったため、これらの山々が海面上に出ていたのです。これにより日本列島と台湾、フィリピン、インドネシアが島々としてつながっていた可能性があります。この地域は赤道海流が流れ込んでおり、非常に住みやすい場所だったと思われます。

当時の人々は、まだ暴力的な争いが少なく、平和に暮らしていたことでしょう。魚を食べ、果物を採り、ときにはマンモスを狩るなどして生活していたと考えられます。特に日本列島では、温泉があり、キャンプ地として最適な場所でした。約10万年という長い時間、人々はここで安定した生活を営んでいたのです。私の仮説では、この東南アジア湾こそが最も古い文明の発祥地であり、日本列島の縄文時代や旧石器時代の遺跡も、ここから発展していったのではないかと考えています。この地域の人々が、船を作り、航海術を発展させた結果、世界中に散らばっていったのです。

また、日本列島に集中していた人々が、なぜ青森に多く集まったのかという点についても触れておきます。防衛省が行った調査によると、ゴミが最も漂着する場所は五島列島や青森の津軽海峡付近です。この場所は黒潮が北上し、親潮と交わることで海流が淀むため、物が漂着しやすいのです。昔の人々は船で移動しており、エンジンもないため、海流に頼って移動していたと考えられます。そのため、青森には多くの人々が漂着し、定住していた可能性が高いのです。

私の説では、東南アジア湾に住んでいた人々が、海流に乗って日本列島にたどり着き、青森を拠点として豊かな生活を営んでいたのではないかと考えています。約10万年の間、彼らはマンモスやナマズを食べながら、温泉を楽しみ、平和な生活を送っていたのです。この仮説が正しければ、私たちの祖先は東南アジア湾から日本列島に移り住んだ人々であり、私たちはその子孫であると言えるでしょう。

以上が、私の「人間の起源は東南アジア」という仮説です。これからも研究を続け、さらに新しい発見があることを期待しています。

【日本史分科会】

研究発表

「最難関への論述指導を通じて」

発表者 青森県立弘前高等学校 齋藤開

助言者 青森県教育庁生涯学習課指導主事 成田邦彦

1 はじめに

新採用で弘前高等学校に赴任し3年目となった。今回発表者として発表内容を考えていた際に、本校校長・本会副会長古川浩樹先生より御助言をいただき、論述指導への取り組みについて発表させていただくことになった。この発表準備により昨年度の振り返りを行うことができたことは今年度大いに役立っている。また、誰しもが最難関大学を目指す生徒とともに学ぶ可能性がある。この発表が、そうした先生方のお役に立つことができれば幸いである。

2 論述指導について

○弘前高等学校について

私が勤める青森県立弘前高等学校は県下有数の進学校であることから、生徒の学力はもとから高い。東京大学や京都大学などの最難関大学志望者や東北大学などの難関大学志望者が多く、生徒や時期によって指導・支援の仕方が異なる。また、昨年度、私も最難関大学を志望する生徒を複数名支援してきたが、今回はその中でも東京大学に的を絞る。

○論述指導について

私は論述において最も重要なことを「問われている主題に沿って解答を作ること」と捉えており、これは生徒に対し何度も伝えるように心がけている。答えるべきことは理由、経緯、背景など多岐に渡り、適切な解答を作り上げることが必要になる。このことについては共通テスト後の二次試験対策から伝えるのでは遅く、2年生の履修開始時からの種蒔きが必要である。定期テストや校内模試では必ず論述問題を出題し、復習・練習の機会を増やしている。最初は40字程度の設問から開始し、3年生の校内模試以降は200字の論述を出題している。特に3年生5月に実施する第1回校内模試では、全員の答案へ添削を行い、生徒のモチベーション向上を図るとともに、論述問題への取り組み方を印刷物として配布している。

3 実際の対策

○二次対策講習（講座制授業）について

私が昨年度担当した東京大学志望者は1名であった。大学こそ違えども高校時代に最終的に1人で（先生方の手厚い御指導はあったが）対策していた私自身の経験から、できる限り生徒と同じ目線に立ちたいと思い、難しいと感じた問題は「難しかった」、間違えた問題は「間違えた」と、隠さずに本音で対話するように心がけた。また、解答例は基本的に教学社出版の赤本を生徒に配布したが、問題や生徒の解答によっては別資料を配布し、柔軟に対応したが、赤本やその他の解答例に近づけることを目的とするのではなく、必要な要素を入れていくことを重視した。

生徒の状況としては、表現力や記述力は対策開始前から既に優れていたため、問題形式への慣れが大きな課題であった。添削は基本的には大学の過去問を利用したが、これにより頻出の分野を把握することもできた。時間の制約もあり、1日につき大問2つを添削し、対面で実施した。そのための予習は1回につき6時間ほど行ったが、当然ながら調べれば調べるほど分からないことが出てくるため、時間は常に不足していた。「この生徒はこれが気になっているのでは?」、「この生徒にはここだけでも伝えたい」と考えると、本当に際限がない。先述のとおり生徒の能力は高い。生徒に負けたくなかったが、蓋を開けてみると私の解答より何倍も素晴らしいものであることもあった。やはり最難関大学を目指す生徒はそうあってほしい。

○ICTについて

昨年度の添削では、ICTはほぼ活用しなかった。生徒が私大受験のため東京に滞在している時期に、一時的にロイノートを利用した。論述指導の効率化のためにICTを活用することは私自身の今後の課題である。

4 おわりに

○論述指導を振り返って

発表準備の過程で最初の添削と最後の添削を比較した。すると、生徒の成長以上に、私自身の成長が顕著であった。最初の添削は手探りで記入内容が非常に少なかったが、最後の添削は問題を構造的に分解し、どのような解答が求められているのかについて添削していた。教員の仕事として、生徒を育てることを第一に掲げることが多いと思う。私もそれが教員の存在意義の一つであると考えているが、私が添削指導を振り返って思うことは、「生徒に育ててもらった」ということである。私はあの生徒のおかげで東京大学受験の後押しや解答の添削方法を学ぶことができ、今年度引き続き指導・支援にあたることができている。ここで感謝を申し上げたい。

○発表を終えて

今年度の4月末に日本史地区責任者を拝命し、その際に古川浩樹先生から御助言をいただき今回の発表に至った。また、発表準備の段階では様々な先生方からも御助言をいただいた。そうした先生方に末筆ながら感謝を申し上げる。

【世界史分科会】

研究発表

「14 世紀の地球規模の環境変化が世界史に与えた影響についての考察 ～無理のない範囲での ICT 活用～」

発表者 青森県立青森高等学校 道川貴生

助言者 青森県総合学校教育センター高校教育課指導主事 柴田裕介

1 はじめに

昨年度本校に赴任し、現在世界史を担当している。ここ数年で学校内の ICT 環境が急速に整備されたところだが、その間学校現場から離れており、ICT 活用についてのノウハウを全く持ち合わせていない状態で、平成 24 年度以来 11 年ぶりに授業を行うこととなった。以下現状できる範囲で取り組んだ ICT 活用と研究授業について報告する。

2 昨年度から本年度にかけての授業実践

実践の一つ目として、「思考力、判断力、表現力等」の育成のための授業実践を、ICT を活用しながら取り組むこととした。そのねらいは、生徒自身の言葉で習ったことをまとめることによる学習事項の定着、その際、他者と協働しながら課題に対する答えを導き出す訓練機会の創出、大学入試における論述問題への対応の 3 点である。教材研究等に十分な時間をかけて臨みたかったところだが、教務部に配属となり、赴任早々新年度の準備や県教委への提出書類の作成等に追われ、授業準備時間がほぼ取れなかったため、現行の世界史探究の教科書で随所に設けられた「問い」をそのまま活用することとした。授業では、一通り説明したあと、「問い」について個人で 2 分程度考えさせ、その後 3 分程度のグループワークまたはペアワークにより意見交換を行わせた上で、最後にグループ毎に回答をさせ、クラス全体で回答を共有し、解説を行うこととした。

この活動には、5～10 分ほどの時間を要するが、50 分の授業において少なくとも 1 間は扱うようにしている。ただ、昨年度当初は教員用に渡されている iPad を使いこなせず、グループワークに取り組みせたとすぐに、自前のノート PC (windows) からプロジェクトに接続して解答例を示したり、2～3 人に口頭で発表してもらったりと、旧来の手法で開始した。その後 iPad の操作方法を身に付けた上で昨年 10 月頃からようやく Jamboard や Google classroom (右図) を使い全グループの考察結果を共有するようになった。



実践の二つ目として取り組んだことは、世界史指導の様々な場面で Google workspace の様々な機能を活用することであった。上記「問い」に対する考察結果をクラス全体で共有するだけでなく、問題演習や課題について Google form を用いて解答させることに取り組んだ。これは大学入試共通テストを控えた 3 年生に対する指導で効果があったと実感している。特に演習直後に設問毎の解答状況の「見える化」ができるため、優先的に解説すべき問題を瞬時に判別して指導を行えるとともに、生徒も重点的に復習すべき事項を把握しやすいというメリットがあると感じている。

このような ICT を活用した実践は、昨年度の 2 年生の生徒を中心に取り組んできたが、今年度授業を行ってい

て感じることは、授業中の発問に対し、的確な解答が返ってくることが多くなり、基本的な知識が定着している生徒が多くなったということである。実際定期考査においても、最頻値が昨年度の3年生が60点台であったところから、今年度は80点台となり、昨年度から上記実践に取り組ませてきた今年度の3年生の方が高得点者の割合が多くなっている。

3 研究授業の実施

(1)ねらい、先行事例などについて

生徒の「思考力、判断力、表現力等」育成に向けた授業改善を図るため、本年6月下旬に研究授業を行った。そのねらいは、授業における世界史の横のつながりを意識する場面の設定の手法を身に付けること、自然環境の変化が諸地域における社会の変化をもたらすことを理解する場面の設定に挑戦してみること、加えて生徒の考察結果をクラス全体で共有するためのより良い手段（アプリや機能）の模索をすることである。

そのためのテーマとして、14世紀の地球規模の天災が世界史に与えた影響について、当時の気温や人口に関する資料をもとに、多面的・多角的に考察することとした。設定の理由は、14世紀は、寒冷化とペストという地球規模の環境変化が見られ、ユーラシア大陸各地で共通して①内紛や農民反乱が発生し、②それまでの支配体制が衰退・崩壊し、その後15世紀にかけて③中央集権化、皇帝独裁の強化がみられる時期であり、考察が容易と考えられるためであった。

実施に先立ち、類似の先行実践事例をwebで調べたところ、14世紀を事例として、「文明が危機を迎えている状況」について考察し、「危機」という歴史的現象の一般化を試みる授業¹など、ヨーロッパに視点を置いた実践例は散見された。しかし、「14世紀の危機」をテーマに寒冷化がユーラシア各地に与えた影響に関する共通点について考察する実践を見つけることはできなかった。このような中、深草正博氏（皇學館大学名誉教授）の次の文が私の研究授業の方向性を示唆してくれるものとなった。

14世紀に入ると状況は一変する。ほぼ1世紀にわたるこの地球的規模の大変異をモンゴルを中心に見事に描いたのは杉山正明で、「世界史」を論じようと試みる者は、この14世紀をおおった暗黒と不幸から目をそらすべきでないと強調する。ユーラシア全域が地震、洪水、長期の異常気象に見舞われ、モンゴル帝国はこれによって沈み込み、1346年からペスト（黒死病）がエジプト、シリア、東地中海沿岸部、さらにヨーロッパを襲い、国家と社会を破滅に追い込む。杉山はこの原因がわからないとしたが、私は、図3から1320年代からおよそ40ないし50年代までの滑り落ちるような寒冷（が原因）であることを突きとめた。（中略）ヨーロッパでのジャックリーやワットタイラーの乱、中国での紅巾の乱、日本の南北朝内乱もこうした時代背景の中に位置づけられなければならない。²

(2)授業の展開

研究授業は、中世ヨーロッパ、モンゴル帝国に関する学習を踏まえたまとめという位置づけで実施した。また、授業の形式は、生徒4～5人でグループをつくり、ワークシートに提示した「問い」に対する考察を進めていく形で進めた。考察を行うにあたって、生徒には、情報収集、回答送信等のためにiPadを活用させた。教員の端末は「問い」や参考情報・資料の提示、各グループの回答結果をクラス内で共有するために使用した。また、今回の研究授業において新たに実践してみたことは、生徒達が考察した文章をよりスムーズにクラス全体で共有するためには、回答を写真で提出させればよいのではと考え、Google classroomの授業機能を用い、生徒達がワークシートに記入した回答を写真に撮り、それをアップロードさせ、回答を共有するという方法をとってみた。

授業において生徒達に取り組ませた「問い」は、以下の5問である（内容は一部書き換えている）。

¹ 柴泰豊「『波立つ歴史』の実践」、『神奈川県高等学校教科研究会社会科部会歴史分科会 研究報告』、第49号、2020年、p.37-41。（URL）http://kanagawarekishibunkakai.cho88.com/kenkyu_houkoku_2020.html

※実践動画も公開されています。

² 深草正博「環境史と世界史」、歴史的思考力を伸ばす世界史授業デザイン、福井憲彦・田尻信壹、東京、明治図書、2012、p.47

Q 1 「モンゴル帝国が崩壊（元がモンゴル高原に撤退）した理由」

Q 2 「1200～1500 年頃のイギリス、フランス、中国の人口について、web で調べた結果(推計値)を表にまとめよう」

Q 3 「14 世紀の気候と、当時の世界各地の人口の関係について、気付いたことをまとめよう」

Q 4 「14 世紀の世界各地の社会を大きく変えた（と思われる）できごとをまとめよう」

Q 5 「14 世紀の地球規模の環境変化(天災)が世界史に与えた影響について、その要因も含め考えをまとめよう」

Q 1 は、導入として前時までに学習したことを自分の言葉で再構成させることをねらいとして取り組ませ、Google classroom のストリーム機能を用いて回答をさせたが、比較的スムーズに行うことができた。次の Q 2 では、問いにすぐ対応できるよう、予め参考となるデータをウェブで調べておくよう指示し、それを参照させながら取り組ませたが、生徒達は資料を読み取ってワークシート内の表に記入する作業にかなり手間取っていた。この問いでは、各グループの回答を共有するために、写真(画像)で提出をさせた。生徒は画像送信を難なく行っている様子が見られ、スムーズに共有することができた。Q 3 は、Q 2 を踏まえ、別途配布した人口及び気候変動に関するグラフを読み取らせる単純な作業であったため、生徒の活動はスムーズに行われた。Q 4 は、これまでの復習として、生徒達は容易に取り組めるものと考えていたが、問いが明確でなかったため、既習事項から何を取り上げるべきか困っている生徒が見られ、こちらから取り上げるべき内容について補足を行わねばならなかった。Q 5 は、時間を十分にかけて取り組みたかったが、Q 2 に予想以上に時間を要したことで、駆け足での考察を生徒に敷いてしまった。しかしながら生徒達は問 2～問 4 でまとめたことを踏まえ、例えば下のワークシートのように 14 世紀半ばの寒冷化、ペストによる人口減少が農民反乱の発生、新しい国家や王朝の成立、ルネサンスに影響を及ぼしたということまで言及ができ、限られた時間の中で生徒達が頑張って考察活動に取り組んでくれた。

Q 5 14 世紀の地球規模の環境変化(天災)が世界史に与えた影響について、その要因も含めて皆さんの考えをまとめよう
小氷期やペストの流行により、人口が減少し、飢饉も起こったため、人々の生活が苦しくなり、反乱も起こり、新しい国が成立した。
⑤ 小氷期 → 農作物 × → 生活 ⑤ → 反乱 → 新に建国
+ ペスト流行 → 人口 ↓

(3) 成果と課題

研究授業実施後、Google form で生徒に授業の振り返りをしてもらった。生徒からは、気候や人口に関する複数の資料から、気候変動が各地域に与えた影響には共通点が見いだせること、歴史のヨコのつながりを理解できた等、学び・気づきが得られたという感想が寄せられた。その一方で、考察の時間が足りない、グラフの読み取りが不十分であった、グループワークで考察した結果を、無理にタブレットに入力しなくても、口頭で直接発表してもよかったのではという生徒の素直な感想・意見も寄せられた。

また、合評会においても、生徒同様の意見が寄せられたとともに、問い立てが不明確で生徒が戸惑っている様子が見られたため、工夫が必要であるというアドバイスもいただいた。さらには、生徒の回答を共有する際のツール・アプリをもっと検討すべきであるという意見もいただいた。

これらの感想や意見は、授業を進めながら感じていたことであり、すでに、取り入れているものもあるが、今後の授業でさらなる工夫・改善を図っていきたい。

4 おわりに

本校に赴任して 1 年半ほどの実践を通じて、今後の授業実践における自身の課題は以下の 3 点である。1 点目は自身の知識・理解が不足していることである。約 10 年間授業を行っていなかった間に世界史に関する知識・理解が低下してしまい、それを日々の授業準備の中で必死に取り戻そうとしてきたが、未だ不十分であり、様々な歴史的諸事象に対する深い理解のための研鑽に努めていく必要があると痛感している。2 点目は、指導内容の精選である。3 年生に対する指導を行うなかで、あれもこれも大事だからと、過去の大学入試で問われた内容を指導内容に盛り込み、微に入り細に入り一方的に説明してしまう場面が多くなっている。説明に終始し生徒が主体的に学んでいく場面を十分に創出できていないと感じているため、ツボを押さえた指導ができるよう授業準備等を行う必要がある。3 点目は、生徒が社会に出た時に役立つことよう ICT を活用させることである。例えばグループワークで Google スライド等共同編集アプリを使うなど、生徒の学習に役立ち、かつ社会に出た際にも活用できるアプリを積極的に活用していきたいと考えている。

(参考) 研究授業指導案



研究授業ワークシート



研究授業参考資料



【地理分科会】

研究発表

「地域再発見 地理フィールドワークの授業」

発表者 青森県立三沢高等学校 酒田 孝

助言者 青森県立五所川原工科高等学校教頭 川崎淳平

1 はじめに

本校は学年6クラスで、2・3年生は1～3組が理系、4～6組が文系である。私は本校で、2年生の『地理総合』（必修）と3年生の『地理探究』（選択）を担当している。『地理探究』は3年生の理系クラスが選択している。高校の地理では、前回改訂の平成20年指導要領から「地域調査」が盛り込まれた。かねてから地理巡検をやってみたいと考えていた私は、指導要領の改定をきっかけに平成27年から三沢高校でフィールドワークを始めた。「地域調査」は現在の平成30年指導要領の地理総合に引き継がれた。その後転勤した六戸高校でも、一昨年に戻ってきた三沢高校でも、同じ形で、ずっとフィールドワークを続けている。

2 指導要領の記述

地理総合 生活圏の調査と地域の展望

生活圏の地理的な課題について、生活圏内や生活圏外との結び付き、地域の成り立ちや変容、持続可能な地域づくりなどに着目して、主題を設定し、課題解決に求められる取組などを多面的・多角的に考察、構想し、表現すること。

3 巡検の目的

2年生の『地理総合』では、フィールドワークを地図と地形・防災の学習のまとめとして実施している。地図や地形・防災に関する知識を、単なる机上の知識として「暗記」するのではなく、実際のフィールドの中で確認させるためである。また、3年生の『地理探究』（昨年までは『地理B』）は都市問題の学習の後に実施している。これも、ドーナツ化現象、CBD、都市の再開発、ロードサイド型店舗、スプロール現象などの事象を、単なる知識としてではなく、景観として確認させたいからである。自分の住んでいる地域を、地理的な視点というフィルターを通して見ることによって、自分の住む地域を再発見して欲しいという思いがある。

4 巡検の計画

(1) フレーム（時間と場所）を決める

巡検の時間は2時間続きとして、その前の1時間は説明と準備、終了後にレポート作成のための1時間をとって、合計4時間の授業とした。2単位の授業の中ではこれが精一杯だった。時期は後期の最初、10月上旬とした。40人ほどの生徒が移動することになるが、バスを用意する予算はないので、歩いていける範囲（半径2～3km）を班ごとに徒歩で調査することにした。

(2) 地図を手に入れる

国土地理院の2万5千分の1の地形図は歩いて店舗や建物を調べたりするには、あまりにも縮尺が小さい。そこで1万分の1の地形図（都市計画図）を手に入れようというところ、市町村で販売していることがわかった。2500分の1の地形図は建物の形などが明確に表現されているため、建物ごとの色塗りなどの作業などに適している。学校教育に使用する場合、無料にするという減免条例があることがわかり、無料にもらった。

(3) 「ミッション」を考える

引率なしで班ごとにフィールドワークをするために、そして何より「這い回る経験主義」にしないために、明確な「指示（ミッション）」が必要である。ミッションはできるだけ単純でわかりやすいものがよい。一つの班に与えられるミッションの数は、時間が2時間しかないため、できれば1つか2つに絞る必要がある。

5 フィールドワークの実施

教務にお願いして、時間割を変更してもらい、2時間続きの授業にしてもらった。持ち物は、地図とミッションシートと撮影用のタブレットだが、必要に応じてスマートフォンに標高アプリをダウンロードさせて持たせた。フィールドワーク当日、生徒たちは班ごとに街に出ていった。遠い班は自転車もOKにした。私は市内を巡回して写真を撮影したり、分かりにくい場所の案内をした。

6 レポートの作成・発表

フィールドワークの後でレポート作成の時間を1時間とり、レポートを班ごとにGoogleのスライドで作らせた。発表はスライドショーをスクリーンで写しながら班ごとに行った。発表に際して、ミッションだけでなく、目的地まで歩いた経路を地図上で表示し説明すること、考察についても発表するよう指示した。経路については、ストリートビューの動画を作って経路を説明した班もあった。また、考察では市のハザードマップの欠陥を指摘する班もあった。

7 おわりに

地理の学習は、混沌としたリアルな世界を読み解くための知識やスキル、見方・考え方を身につけることを目指している。それゆえ、知識を注入するだけの、いわゆる「銀行型教育」は、地理の学習においてはあまり意味を持たない。少しでも勇気を出して、生徒と一緒にフィールドに出て、学んだ知識やスキルを検証する経験をさせたい。そのことによって、生徒たちは、自分たちが生活している地域の魅力を再発見する目を手にいれることができると思う。

【公民分科会】

研究発表

「主権者教育について考える」

発表者 青森県立八戸中央高等学校 嵯峨真己子

助言者 青森県教育庁学校教育課指導主事 村元直記

1 はじめに

教員になって以来、定点観測のようにずっと15～18歳の高校生に接している。生徒との年齢差は開く一方なのは当然だが、それにしても生徒の社会的関心が薄れていく感じがずっとしていた。特にデジタルネイティブといわれるZ世代は新聞やTVでニュースを見ることもないから…といっても、これは日本に限った話ではない。ところが、日本の政治や経済の各種指標の世界ランキングはこの十数年間で下がる一方である。若者は最近の日本政治の劣化も、劣化前の状態を知らないのがこれが普通と思っている。社会に対する意識調査でも精神的幸福度でも、日本は諸外国と比べて低く、このことは若者の投票率の低さにも反映しているように思われた。

ただし、主権者教育について考える際、原因を大きく捉えすぎることは、手をこまねいて何もやらないのと同じになってしまうので、目の前の生徒たちに対して、今日明日の授業でできることを考えていきたい。

2 文科省の方針としての主権者教育…参考：「今後の主権者教育の推進に向けて」

(文科省・主権者教育推進会議・令和2年11月2日)

- ・主権者教育に重点が置かれるきっかけは平成27年の「選挙権年齢の満18歳引き下げ」。その年に局長通知が発出、検討チームの設置、さらに全国の高校生に『私たちが拓く日本の未来』が継続配付となる。配付以降、現場で主権者教育をしたかどうかの調査もしており、令和元年度は約96%が実施したとのこと。しかし、18歳選挙権が始まって以降の若者の投票率(国政選挙5回)は全く上がっていない(副読本を配付し、主権者教育の号令をかけているというポーズ、アリバイのよう)。
- ・新学習指導要領の改善に関わる中央教育審議会答申では、主権者教育の望ましい方針がてんこ盛り。
 - ①小・中学校からの体系的な主権者教育の充実 ②知識の習得のみならず、考察力・合意形成力・主体的参画力等のため教科横断的に ③家庭における教育 ④地域の教育資源の活用 …省略…
 - ⑧現実社会の諸課題について多面的多角的に考察を深め…政治的中立性の担保も課題

3 主権者教育がなかなか進まない理由

- (1)時間がとれない…「政治経済」を共通テストの受験科目として授業する場合などは特に、時間をとるのが困難。
- (2)準備が大変…優れた実践例(関係機関との連携、生徒会活動と連動、他教科と教科横断的に実施等)は数多くあるが、計画・調整をかなり前からしなければならず、ハードルが高い
- (3)親の職業や生徒の進路に対しての配慮(政治的中立性ではない)…現実社会の事実であっても、家庭環境の違いで受け取り方に差が出る。どんな立場から聞いても傷つかないような言い方になる。

4 目の前の生徒に対して、日々の授業でやれること

我々は日々の授業の準備だけでなく、校務分掌・担任業務・部活動等に忙しい。主権者教育が大事だとはわかっていても、特別なやり方でやろうとすると機会を逸する。さらに、一回の授業で劇的に主権者意識が身につくといったようなやり方もない。ただ、主権者教育とは理論や知識(有権者ノウハウ教育)ではなく、感情の話なのだと思う。社会は変えられる、シニシズム(冷笑主義)ではだめなんだ、選挙に行かなければ!などという切羽詰まった感情になるこそ主権者教育なのではと思う。目の前の生徒たちの感情をちょこっと揺さぶるような授業、心に何かがひっかかるような授業は、大がかりな仕掛けをしなくとも、ちょっとした教師の言葉や、前日、なんだったら授業の1時間前位に準備しても間に合うような教材の中で出来るのではと思う。私も日々そういった授業を模索しているが、以下は今まで行った授業例である。

(1)「選挙権と棄権」

仮想国家の有権者(81 人)が国民投票や小選挙区制選挙を行うという、スライドとワークシートを使った授業。国民投票で賛否どちらかが勝つために必要な票数や、政権与党になるための理論上の最低得票数を計算させる。有権者全員が投票した場合と、棄権が4～5割あった場合との違いも比較する。この授業のねらいは、棄権するということは、選挙結果(どの党が政権を獲得したか)がどうであれ、その選挙全体の結果を補完していることになることを実感すること。イギリスのEU離脱の国民投票や、認知バイアスのバンドワゴン効果にも触れ、しっかり考えて投票することの大切さを理解させる。

(2)日本国憲法第11条と第97条の比較

この二つは基本的人権の本質についての条文である。ほとんど文言は一緒。103ヶ条(実質は99ヶ条)しかない憲法でなぜ、97条で基本的人権の本質がまた載せられたのか。97条に増えた箇所「人類の多年にわたる自由獲得の努力の成果であつて、これらの権利は、過去幾多の試練に堪へ」を見つけさせて、この部分を増やすためだけに97条が存在するのはなぜかを考えさせる。天賦人権というが、突然与えられたのではないこと、人権の危機(試練)は過去・現在・未来と何度もある中で、堪えつないでいくべきものであることを理解させる。例としてエミリー・デイヴィソン(英1872ー1913 女性参政権獲得のためにダービーで国王の馬に突っ込んで死亡)の壮絶な最期を紹介した(映画『未来を花束にして～原題: サフラジェット』の予告編の視聴)。

(3)NHKスペシャル 新・映像の世紀「第6集あなたのワンカットが世界を変える～21世紀の潮流～」

(初回放送2016年3月20日)

スマートフォンで簡単に写真や動画が撮れる時代。誰かが撮った映像が政治を揺るがしたり、国境を越えた連帯が生まれたりといった例が次々と出てくる。4年前、3年生の夏休み講習があまりに暑くてエアコンの効いた情報処理室で受験に関係ないがと見せ、視聴後、「印象に残った場面」と「感想などなんでも」を書いてもらう紙を渡しておいたところ、驚くほど期待以上の感想が集まりそれに感動した。泣きながら見たというのもあった。自分たちと同じ年頃の人たちがたくさん出てきて、感情移入出来たのだらうと思う。8年前の放送なので古くなってしまったが、意外な素材が生徒の心を揺さぶることもあるのだと思った。

5 おわりに

政府は本気で生徒たちを真の主権者にさせようとしているのだろうか。市民が政治的に成熟し、主権者意識に目覚めれば、どんな政党が政権を握っていたとしても、その政権にとって市民はやっかいな存在として立ち現れる。市民はもの申す存在として政権への監視がしっかりなされ、意見や要求も多く、まずければ政権交代がなされるからである。

民主政を本気でやろうとしたら市民に政治的成熟を求めることが必要である一方で、一度権力を掌握すれば「市民が幼稚で愚鈍である方が統治コストが安く上がる政体(by 内田樹)」という状況に抗うためにも、我々教員は「主権者教育を一応やっている」というアリバイ作りに加担するのではなく、投票率そして投票質をあげる次世代への教育を考えたい。

おすすめ書籍

- ・『従順さのどこがいけないのか』 (将基面貴巳／ちくまプリマー新書／2021年9月初版)
- ・『表現の自由「政治的中立性」を問う』 (市川正人／岩波新書／2024年7月初版)
- ・『若者とともに』 (宮下与兵衛／かもがわ出版／2024年4月初版)

【今年度の部会の動き】

No.	項 目	時期・会場	内 容
1	地区総会	4月下旬 各地区	・地区役員選出ほか
2	第1回役員会	5/17（金） 青森県総合社会教育センター	・新役員確認 ・県科目責任者選出 ・庶務／監査／決算報告 ・事業計画案／予算案審議 ・令和6年度総合研究大会について
3	第2回役員会	6/17（月） 青森県総合社会教育センター	・総合研究大会実施要項案審議 ・業務分担確認 など
4	研究大会要項 ・参加申込書発送	7/5（金）	※今年度は事前に巡検参加希望者の 概数調査を実施
5	研究大会 ・申込み締め切り	7/18（木）	
6	参加費納入締め切り	7/25（木）	・巡検費、教育情報交換会費、 昼食費も同時納入
7	総合研究大会	8/20（火） 青森県立八戸高等学校	[1日目] ・総会／講演 ・研究発表及び協議 地理：二北、日本史：西北・中南 世界史：東青、公民：三八 ・教育情報交換会
		8/21（水）	[2日目] 八戸市内巡検
8	各地区研究会	地区ごとに設定	地区ごとに適宜開催
9	研究紀要編集	9月下旬	・本部事務局へ提出
10	特別会計監査	2月中旬（予定）	
11	第3回役員会	2/15（木）（予定）	・庶務／監査／決算中間報告 ・研究大会の講師の検討 など
12	特別会計報告	3月中旬（予定）	・本部事務局へ提出
13	会計監査	3月下旬（予定）	

【研究テーマ】

年度	テーマ
令和6年度	「自分」「地域」「日本」「世界」の将来を考え、行動する生徒を育成するための実践